

# 「伝統芸能」のいま —戦後歌舞伎・落語興行の計量分析から—

坂部 裕美子

「伝統芸能」という単語の指し示す範囲は非常に曖昧で、公的な定義も存在しない。そこでまず、文化芸術振興基本法の例示や国立劇場の調査における項目から、「伝統芸能」と思われる芸能を具体的に確認した。さらに、伝統芸能もしくはそれに近い芸能から、「業界全体を網羅した興行データ」が存在する分野として歌舞伎と落語（寄席定席興行）を選択し、これらについて定期興行データの統計分析を行い、その集計結果から「伝統芸能」たる要件を考察することとした。

歌舞伎興行データの集計からは、三大狂言の上演頻度が高いことや、配役データを用いた役の格付けが可能であることなどが分かったが、近年の歌舞伎興行で上演される演目が、ごく一部の演目に大幅に偏っていることも数値で明らかになった。

落語興行データからは、トリを取る回数と定席興行への出演回数には相関があることや、定席出演者を一門別に集計すると小さん一門が圧倒的に多くなること、さらに小さん一門は世代交代も順調に進んでいることなどが分かったが、寄席出演回数上位のメンバーが長年固定的なのに対して、近年は寄席にほとんど出られない落語家が飛躍的に増大し、出演枠の配分が大きく偏っている現象が確認できた。

この2つの分析から「演目の偏り」という傾向が確認できたので、文楽、そして比較用に宝塚の興行について、上演演目の集計を行ってみた。だが、最も上演回数の多い演目への集中度は、2つとも歌舞伎における集中度より低かった。

このデータ集計を通じて、「伝統芸能」が共通して持つ特性として、演目の偏りに加え、興行の場所・期間が固定的であること、業界の中心世代が移行していること、さらに、データに表れるもの以外にも、一門という枠組みがあること、強力な後援会組織があること、などを想定してみた。だが、ここまで分析してきた各芸能分野はそれぞれこれらの要件への当てはまり状況が異なり、絶対的な要件とはならなかった。

2012年は、文楽・歌舞伎・落語が、その長い興行史の中で、大きな過渡期を同時に迎えた年であったと言える。現在まで続いてきた「伝統芸能」の今後に期待したい。

興行史の研究において、本論は数値解析を積極的に導入した最初期の成果報告となるが、随所に改良の余地があり「最終報告」には至っていない。本論が「統計解析」に可能性を見出す契機となれば本望である。